

7月28日「愛の大きさ」ガラテヤ6：1～10、ルカ7：36～50

皆さんは愛って測れると思いますか？ 目には見えないし、実態のないものです。昔スマップの『KANSHA して』という曲に「愛さえあればいいと言いながら、プレゼントの値段だけで気持ち測ってる♪」というのを聞きながら小学生ながらに「世の中そんなもんさ・・・」となんかわかったような気になっていたことを思い出します。目に見えない、測れないからこそ価値があるものとして聖書では「愛」と言うと思います。けれども、今日、イエス様は言うのです。「7：47 だから、言うておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」え～ショック！ ですよ。イエス様もどうやら愛を測ってたらしい。愛には大きい小さい、多い少ないがあるらしい。どういうことなのでしょう？

イエス様は色んな人のところに招かれて一緒に食事をしたり、語り合ったりされました。それは激しく対立していたであろうファリサイ派の人であってもそうされたようです。しかも今日のところではその人を「シモン」（ペトロとは同名の別人）と名前で呼んでいますので、かなり親しい間柄だったことが伺えます。さて、イエス様が彼の家に食事に招かれた時のことでした。イエス様が食事の席に着くと、一人の女性が近づいてきて、イエス様の足を涙で洗い、髪でそれを拭い、また高価な香油をイエス様に注ぎかけました。今みたいな靴はありませんから、イスラエルではサンダルもしくは裸足で歩いていました。家に入ると足を洗いましたが、それは奴隷の仕事でした。また、イスラエルの地方はとても乾燥しています。香りの良い油を頭や肌につけることも盛んでした。今でいうクリームとかトリートメントのようなものですね。この女性はそうやって最上級のもてなしをイエス様にしたのです。ところが、その様子を見ていたファリサイ派のシモンはこんなことを思いました。「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに・・・」どうやら、この女性は町で有名な罪深い女性だったようです。この罪がどういった類のものかは分かりませんが、恐らく娼婦だっただろうと解されています。ファリサイ派のシモンは「この女性の正体を見抜けないから、イエスはなすがままにさせているのだ。本当の預言者ではないのだ」とイエス様を侮ったのです。

ところが、イエス様の真意は別のところにありました。シモンにこんな例え話をされました。「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオンである。二人には返す金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。」シモ

ンは答えます。「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います」それはそうですね！金額が10倍も違うんですから。ちなみにヘブライ語やアラム語に日本語でいう所の「感謝」に相当する言葉はないらしく、ここでの「愛」とは「感謝」的なニュアンスと取ることも出来るようです。

そこでイエス様は女性のもてなしを受けていた真意をお話しになりました。「この人を見ないか。わたしがあなたの家に入ったとき、あなたは足を洗う水もくれなかったが、この人は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれた。あなたはわたしに接吻の挨拶もしなかったが、この人はわたしが入って来てから、わたしの足に接吻してやまなかった。あなたは頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、この人は足に香油を塗ってくれた。」イエス様は女性の正体に気付いていたのです。それでもあえてされるがままにしておられたのです。それは女性にとって必要なことだったからです。女性は罪を赦されたことへの喜びの応答としてイエス様に出来る限りのもてなしをしたのでした。それを受け取ることが、イエス様が女性のために示された愛だったのです！イエス様は言われます「この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさと分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」

イエスさまがシモンに話された譬えは秀逸だと思います。受けた恩の大きい方が感謝も多い、と。実は私は今週4日間も教会を空ける予定にしています。関学ユースキャンプのスタッフを引き受けたからなのですが、教会と保育園の業務を置いていくことを大変申し訳なく思っています。ただ、私は関西学院に大変な恩義があるのです。単に母校というだけではなく、私が入学したころは関西学院には牧半と言って、牧師家庭の子が入学した場合は授業料を半額にするという制度があり、私は授業料をすべて半分にしてもらいました。それに加えて、牧師として3年勤めたら返済しなくても良い奨学金まで借りていました。関学には相当格安で6年間もお世話になったことになります。ですから、関学からの仕事の依頼は個人的に断れないのです。受けた恩が大きい方がより愛するというのは結構その通りだと思ったりします。

今日はもう一箇所、ガラテヤ書からパウロの言葉を聴きました。こんな言葉がありました。「6:3~4 実際には何者でもないのに、自分をひとかどの者だと思う人がいるなら、その人は自分自身を欺いています。各自で、自分の行いを吟味してみなさい。そうすれば、自分に対してだけは誇れるとしても、他人に対しては誇ることができないでしょう。」

ガラテヤの諸教会に向けての手紙の最後の部分ですがパウロが人々に呼び掛けてい

ます。「兄弟たち、万一だれかが不注意にも何かの罪に陥ったなら、そういう人を柔和な心で正しい道に立ち帰らせなさい」キリスト教は罪を教えます。私たち人間は間違いを犯すし、神の前に正しくない生き方をしてしまいます。だからもし罪に陥っている人がいたなら、その人を正しい道へと招くのは大切なことです。けれども、そこで注意が必要です。そういったことは「柔和」な心で行うのです。決して一方的に他者を罪人と決めつけて排除したり、裁くことはしないようにとパウロは言います。なぜか？私たちは皆が罪を抱えているからです。「実際には何者でもない」からです。「各自で自分の行いを吟味してみなさい」そうパウロは言います。

保育園で子どもたちと関わる仕事をしていますと、時には子どもたちを叱ることもあります。特に礼拝のお話し中に隣の子とおしゃべりをしている子どもなどには腹が立って「先生のお話を良く聞きなさい」と言ってしまうことがあります。ですが、良く考えると私は子どもの頃ほとんど先生のお話を聞けない子でした。授業中寝ていたり、他のことを考えていたりしょっちゅうだったことを思い出します。そうなると思ひやり一方的に怒れないと後で悔い改めたりします。

そうなんです。そもそも、私たちは皆何かしらの罪を負って生きています。その罪をイエス様を通して赦してもらわなければ立ってられないほどに。なのに時々、私たちは自分も赦されていることを忘れて、他者を裁くことだけに目が生きがちになるのです。先週の放蕩息子の譬えでもお話ししましたが、私たちはあの話の兄のようになり自分が何の間違ひも犯していないと思ひ込み、他者の罪にばかり目が行くのです。そして誰かに自分の正しさを強要します。でもそういう時はたいてい、自分のことは棚に上げていることが殆どです。兄のためにも父なる神さまは迎えに出て来てくださっていることに気付いていないのです。イエス様は自分たちの罪には目をくれず他者を裁いてばかりのファリサイ派の人々にこんな皮肉を言います。「**マタイ7:3 あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。**」

イエス様はそんなファリサイ派や律法学者たちが罪びとだと見下していた人々と共に飲み食いし、積極的に交流されました。人々はそのことをこんな風に馬鹿にしたそうです。7: 33~34「**洗礼者ヨハネが来て、パンも食わずぶどう酒も飲まずにいると、あなたがたは、『あれは悪霊に取りつかれている』**と言ひ、人の子が来て、飲み食いすると、『**見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ**』と言う。」今日のルカの物語はこの言葉のすぐ後にあります。そこで問われていることも、やはりファリサイ派のシモンが女性を見下していた傲慢さなのです。そうやって女性を罪人と見下し、彼女の感

謝の行動に目を留めようとしないうしモンにイエス様は語りかけます。「この人を見な
いか！？」

一方と他方に宗教的な優劣の壁を作り、守れない者を一方的に裁いてしまう。これは何もファリサイ派や律法学者だけに限ったことではありません。初期の教会の内部にも起きたことでした。パウロが宣教をしたガラテヤ地方の教会に、パウロが去った後にユダヤ人の宣教師たちが入り込んで「異なる福音」を伝えました。どうやら彼らは異邦人のキリスト者たちにユダヤ教の祭歴を守り、割礼を受ける（律法を行うよう）ように指導しました。そうやって教会の中に、割礼を受ける者、受けていない者といった優劣の壁を作り、一方が他方を「律法を遵守出来ない劣った者たち」として裁くようになったのです。パウロはそのようなガラテヤの諸教会の状況を非常に悲しみ、今日の手紙を書きました。そして本当の福音に立ち返るように伝えたのです！

「2：15～16人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義としていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです。」

今日読んだ手紙の最後の言葉で、パウロはそうやって裁き合うのではないあり方を私たちに示しています。「互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです。」それはイエス様が示された生き方だったのではないのでしょうか？そしてファリサイ派のシモンにも伝えたかったことではないのでしょうか？一方的に裁くのではなく「互いに重荷を担い合いなさい」赦し合って生きていきなさい。この人が多くの罪を赦されていることは私に示した愛の大ききで分かるのだから・・・

イエスさまは今日の物語でまるで愛を比べられるもののように語られます。でも確かにそういう側面はあるかもしれません。測ったり、比べたりするものではありませんが、しかしどれだけ赦されているか、どれだけ愛されてきたか、本人の「自覚」には差はあると思うのです。時に私たちは傲慢になり、自分たちが赦されていること、愛されていることを忘れて他者を責めます。自分たちの正しさだけを主張します。他人のおが屑ばかり目が行くのです。でも私たちは改めて自分自身に注がれている神さまの愛を知りたいと思います。私たち自身が愛され、赦されていることを覚えたいのです。その時初めて、互いに重荷を担い合って生きていけるのではないのでしょうか。